

資料5 段階ごとの自己評価と教師の働きかけ

段階	学習活動	教師の働きかけ	自己評価	自己評価の方法
1.めあてをつかむ	○どこに問題があるのか、何を求めるのか明らかにする。	○既習内容と適度なギャップのある状況を設定する。	○本時は何を学習するかを確かめたかどうか。	○ノートに書く。 ○発表する。 ○訂正する。
2.予想する	○既習事項を基にして、解決のための道すじを明らかにする。	○似た既習内容のときに使った知識・技能を思いださせる。	○何を使ってどんな方法で解けたか。	○操作活動をする。 ○ノートにまとめる。 ○サインボックの表示
3.解決する	○自分なりの仕方でもよく解く。 ○作業や操作活動を通して解決する。	○見逃していた事実や観点を示したり、論理の飛躍や矛盾を明らかにする。	○自分の力で解けたかどうか。	○ノートに赤○をつける。 ○まちがいを赤で訂正する。
4.深める	○解決できないときは、もう一度やり直す。	○簡単な問題におきかえ、解決しやすいアドバイスをする。	○別な方法で考えようとしたか。	○ノートに赤○をつける。
5.まとめる	○本時の学習のまとめをする。	○すなおな気持ちで1時間の学習の反省をさせ、次時に意欲をもたせるようにほめる。	○学習態度はどうか。 ○楽しかったか。	○ノートに反省を書く。 ○楽しかった場合は赤○をつける。

資料6 ノートでの自己たしかめ

- 「まとめ」の段階の自己評価
- (1) 本時の学習は楽しかったか。(赤○)
- イ. よくできた。
ロ. よくわかった。
ハ. 進んで発表できた。
ニ. まちがいを見つけた。
ホ. 集中できた。
ヘ. 友達との発表をよく聞いた。
ト. わずかしい問題が解けた。
チ. 忘れものがなかった。(青○)
- (2) 数学的に考えたことができたか。(青○)
- イ. 予想したことが活用された。
ロ. 前に学習したことを活用した。
ハ. 解き方と一番よい方法を見つけることができた。
ニ. 算数のよさ、おもしろさを見つけることができた。

ノートの使い方	たしかめ	留意点
月/日 ㊟ 本時のめあてを書く。	◎	○めあてがはずれている場合は、訂正させる。
㊤ 解き方の自分の考えや見通しなどを書く。	○	○学習の「まとめ」の段階で、本時のめあてが達成できたか評価させる。 (1)達成できた ◎ (2)ほぼ達成 ○ (3)達成できない△ ○自分の予想通りだったときは、赤○をつけさせる。
正しい解決の方法を書く。	◎	○「楽しかった」 赤○ ○「数学的な考え方」青○ (左の表の中から選んで○をつけさせる)
「深める」ための問題を解く、一般化する。	◎	○「楽しかった」 赤○ ○「数学的な考え方」青○ (左の表の中から選んで○をつけさせる)
㊢ 本時の学習でわかったこと、よくわからないところ、自分の学習態度の反省などを自由に書く。	◎	○「楽しかった」 赤○ ○「数学的な考え方」青○ (左の表の中から選んで○をつけさせる)
㊦ 次時の学習の予告を書く。	◎	○「楽しかった」 赤○ ○「数学的な考え方」青○ (左の表の中から選んで○をつけさせる)

資料7 計算カルテ

(5)年(1)組 氏名()		項目	△×の内容	具体的な治療法、結果など
学年	1	加 法	くりがりの減法	15-7の計算
	2	減 法		10のたば、10のたばから7をひくのこり3と5をたす
学 年	1	乗 法		10のたば、10のたばから7をひくのこり3と5をたす
	2	除 法		1の位でひけないとき10の位からくり下す。10の部屋 1の部屋
学 年	1	整数		35-9 ①1の部の部屋5から9はひけない。
	2	小数		

また補説を加えたりして学習を進めることにした。この自己評価は評価の基準をはっきり明示しないと児童は適当にごまかしてしまおうおそれがあるので十分に前もって自己評価の方法等を訓練しておく必要がある。(資料5と6)

なお、ハンドサインと、サインボックスの使用によって自己評価に工夫を加えている。

② チェックリストの使用

③ 相互評価に役立てる(省略)

④ レディネスの補充

ある単元を学習する場合、前時までに学習した既習事項が確実に身につけていないと支障を来すことになる。特に不振児と呼ばれるものは、この既習事項が身につけていないために、学習

について行けなかったり、わからなくなってしまうその傷を上げてしまおう。そこで、目標分析の際に、これだけはレディネスとして確実に身につけていなければならないと思われる基礎基本的事項を取り出した。そして、それをもとに「前提テスト」を自作し実施した。そのテストの結果、学習全体としてまた個別に正答率を一覧表に劣っている事項を再指導した。(一覧表と個別指導の方法は省略)

⑤ 計算カルテ

算数科の学習で計算がよくできないというのは致命傷で、学力調査の結果からも不振児はやはり計算ができないことがわかった。そこで、一年生から六年生までの計算の基礎を学習指導要領から拾い出し「計算の系統表」を作成した。それによって問題を作成しテストを実施した。その結果を「計算カルテ」(資料7)にどんな計算ができないか、どこでつまづいたかを診断し継続して治療を行うことにした。この「計算カルテ」は学年や担任が変わっても継続して使用でき、本人が計算に自信を持つまで何回もドリルとして計算練習ができるようにした。また、担任が個に応じた問題を作成できるので全校生が利用している。

⑥ 算数の学習を好きにするために

五年生の四月に「算数の学習が好きですか」というアンケートの中で八名が「きらい」と答え、なんと不振児の五名がこの「きらい」の答えの中にあ